



Asterisk Networks

私は私が私の頭で考えているという事実を知りたい。確認してみたい。それが自分自身で叶わないのならば、他の誰かの手によって客観的に確かな事実として。

アナタの頭の中がどうなっているのか実に興味があります、と言われることがありました。

それについて書くことをしようと、私の頭は考えます。

思考する頭。

私の頭を説明するには、まず公園の話からしなければなりません。その公園は近所にあり、私は口の中公園と呼んでおりますが、たぶん他の人は呼んでいません。そこに人がいること自体が珍しい公園なのです。公園の真ん中にはベロンと舌のような滑り台がのけぞっており、その両隣には奥歯のようなベンチがあって、奥の方にはブランコがブラブラして、それはまるで前歯のようです。それをもって、私は入り口のところに立っているのだから、下あごの前歯です。何を噛み砕こうという意識もなく、ただそこにある軟弱な存在です。ある日、奥歯んところにOLらしい女性が座っていました。お昼のお弁当箱を持っているからでもレディーススーツを着ているからでもなく、特有の主張の無さがあったから私はOLだと思ったのでした。こっちに来なさい、こっちに来なさいと言うのですから、そっちにしてみるとOLらしい女性が奥歯をパンパンと叩きます。私は横に座りながら、この人は奥歯に座って何をしているのだろうとぼんやり思っていると、OLらしい女性が舌のようなすべり台を指差してあの下がどうなっているのかと聞くので、知らないと答えると、私も知らないと言って笑いました。カカカ！笑い終わるとアナタの頭の中がどうなっているのか実に興味があります、と言われましたので、私にもわかりませんが興味があります、私は私であるという必須が欲しいのだ、私が生きづらい理由がきっとそこにあるはずなのだと答たえると、彼女はそれを確認するには目ん玉

を奥の方に押し込んで見てみるか、けども、力を入れすぎると目ん玉が割れてしまうから注意が必要だし、口の中から小型カメラを入れて脳を見るしかないけども、それは電気が映し出す映像で私の目で見ていたとは言いがたいと言って笑いました。カカカ！この人はどうして私が思っていることをこんなにも理解してくれるのでしょうか。私は世界から見ればおかしな存在ではなかったのでしょうか。黒は黒で白と言ってはいけない世界。私は会話がなんだか楽しくなって来ました。アナタはいつもそこにいるのね、そうしていつもそこにいるのね、と言うものですから、他に行ってもここに居ても、私は私であるからそこに意味なんてないような気がしてと曖昧に答えて、それにしても、今日は暖かい日でありますね、北極は冷たいのでしょうかと答えました。すると、**OL**らしい女性はカカカ！と笑って首が取れるんじゃないかと思うぐらいにうなずき始めたので、私は怖くなって首を支えようと思いました。私の両手は**OL**の首を包むように添えるようにバスケットボールでシュートを打つ選手のようにです。すると**OL**らしい女性は、アナタは私を殺そうとしたのでしょうか、そうでしょうか、私には私が見えます、私をバカにしているのでしょうか、私の場所を奪おうとしているのでしょうか、私をアタナと思っているのでしょうかと騒ぎたてるので、私は怖くなってその場から逃げようと思いました。自分がどうしたらいいのかわからなくなって、奥歯に挟まれたままになってしまいました。その横で、彼女の顔は見る見るうちに真っ赤になって、獅子舞のようになりなりました。あまりにそれが獅子舞のようでしたので、今度は私がそれを見てカカカ！と笑いました。するとあっという間に獅子舞のような顔をした**OL**らしい彼女が口をパクパクさせはじめて私の頭をパクリとその大きな口で食べてしまいました。それからというもの私の頭は獅子舞のような顔をしたその**OL**らしい女性の口の中に存在します。体のことは知りません。けども、私の頭と呼べる意識はそこに浮遊しているという実感がそこにあるのです。適応能力というのはすごいもので、慣れてくると、彼女の目から外の世界を確認することができるようになりました。

後日談。

その舌のような滑り台の下のところに穴のようなものがポツカリとあきまして、それを眺めていたら、眺めてるといっても彼女の視線でもあるのですが、ワタシらしい人が出てきて、公園の入り口から出ていきました。

今、こうしているのは、果たして私であるかワタシであるか、よくわかりませんが、それでも、私とワタシと頭ん中と元気です。元気でやっています。

。

ところで、**OL**はそこに今も座っているのか、ワタシの目からではワタシを見ることができても他の人を見ることは叶わずにいます。

外は少し寒そうですが、とても気持ちがいいです。